

聖書の希望

「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。」(詩篇62:5-6)

聖書の希望の定義

希望というものは未来を指し示す(⇒ロマ8:24-25)。けれども未来の何かをただ単に願ったり望んだりするだけではない。聖書の希望は未来の事柄についての強い保証と固い確信を土台にしている。もちろんこれらの事柄はみことばを通して啓示された神の約束に基づいている。つまり聖書の希望は堅い信仰(ロマ15:13、ヘブ11:1)と神に対する完全な信頼(詩33:21-22)に直接つながっていて離すことができない。詩篇の作者は「君主たちにたよってはならない。救いのない人間の子に。……幸いなことよ。ヤコブの神を助けとし、その神、主に望みを置く者は」(詩146:3-5、⇒エレ17:7)と歌って、「信頼」と「希望」を関連付けている。この詩篇は信仰者の確かな希望は「失望に終わることがありません」(ロマ5:5、⇒詩22:4-5、イザ49:23)と教えている。希望は人生のあらゆる環境の中で私たちがしっかり支える錨のようなものである(ヘブ6:19-20)。

信仰者の希望の土台

確かな希望は聖書に啓示されている神と御子イエス・キリスト、神のことばの性質と特性を土台にしている(⇒「神の属性」の項 p.1016)。

(1) 神がご自分の民のために過去にどれ程真実だったかを聖書は啓示している。たとえば、詩篇22篇は自分のいのちがおびやかされる状況の中でダビデが思い悩んでいる姿を示している。けれども過去にあった神の助けを振り返ってみたダビデは、神が助け出してくださると確信した。そして「私たちの先祖は、あなたに信頼しました。彼らは信頼し、あなたは彼らを助け出されました」(詩22:4)と言っている。確かに神はイスラエルの出エジプト(エジプトの奴隷状態からイスラエルが救い出されたこと)、カナン(神がイスラエルに約束された土地)の征服、主イエスと新約聖書の初期の教会の開拓指導者たちが行った奇蹟、その後の数多くのキリスト者たちの生涯などの中でご自分の忠実な民のために偉大な力を現された(⇒「キリストの奇蹟」の表 p.1942、「使徒たちの奇蹟」の表 p.1941)。このような解放、救出、救い、癒しなどに表された力強いわざを見ると、主こそ助けであるという確信が強まってくる(⇒詩105:1, 124:8、ヘブ13:6、⇒出6:7注)。けれども神との個人的関係を持たない人々には希望を持つ理由も確かな土台もない(エペ2:12、1テサ4:13)。

(2) イエス・キリストによって完全に啓示された新しい契約(御子イエス・キリストのいのちと死と復活を通して霊的救いと神との新しい関係を提供する神の計画)は神に対して確かな希望を持つことができるさらなる理由になっている。神の御子は「この世の神」(Ⅱコリ4:4、⇒ガラ1:4、ヘブ2:14、⇒Ⅰヨハ5:19注、⇒「正しい人の苦しみ」の項 p.825)と呼ばれる悪魔のわざ(Ⅰヨハ3:8)を滅ぼして人々を自由にするために来られた。そしてこの地上におられたときに、悪霊を追放する(人の中に住んでいた悪霊に出て来るように命じる)ことによってサタンに対する権威と力を示された(⇒「サタンと悪霊に勝利する力」の項 p.1726)。最終的に主イエスは死と復活によってサタンの霊的王国の力を打砕いて(⇒ヨハ12:31)、神の国の力を示された(⇒「神の国」の項 p.1654)。ペテロは希望について次のように叫んでいる。「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちが新しく生まれさせて、生ける望みを持つようになしてくださいました」(Ⅰペテ1:3)。この理由から主イエスは私たちの希望と呼ばれている(コロ1:27、1テモ1:1)。そして導き、力づけるために送られた聖霊の力によって私たちは主イエスの力をいただくことができる(ロマ15:12-13、⇒Ⅰペテ1:13、⇒出17:11注)。主イエスの救いの働きは今も継続し、「あなたがたの

うちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを・・・堅く信じ(ピリ1:6)させてくださる。最もすばらしい部分はその日「キリストも・・・二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られる」(ヘブ9:28)ことである。

(3) 神のことばは希望の三番目の土台である。神は預言者と使徒(教会の初期の時代に福音を伝えた開拓期の指導者で、何人かは新約聖書の一部になった手紙を書いた)を通してみことばを啓示された。神の御霊はこのメッセンジャーたちに靈感を与えて、神が人々に伝えたいと願っておられることをその通り、誤りなく書くように導かれた(Ⅱテモ3:16, Ⅱペテ1:19-20, →「聖書の靈感と権威」の項 p.2323)。聖書ほど歴史の中で調べられ、試され、否定され、破壊されようとした書物はほかにない。けれども聖書はあらゆるテストに耐え、歴史の中の多くの人の人生の中で真実であることが証明されてきた。今日までその約束と預言は成就し続けてきた。みことばの中で神が予告されたことのうち実現しなかったものは一つもないし、また未来に実現しないものも一つもない(⇒マタ5:18, ルカ21:32-33, →「キリストによって成就した旧約聖書の預言」の表 p.1029, 「終末の事件」の表 p.2471)。神の「ことばは、とこしえから、天において定まって」いるので(詩119:89)、そこに完全な希望を置かなければならない(詩119:49, 74, 81, 114, 147, 130:5, ⇒使26:6, ロマ15:4)。事実、神とイエス・キリストについて私たちが知っていることはみなこの靈感されたみことばの中に啓示されている。

信仰者の希望の中心

キリスト者の希望はほかの人々や(詩33:16-17, 147:10-11)、所有物や富(詩20:7, マタ6:19-21, ルカ12:13-21, Ⅰテモ6:17, →民18:20注, →「富と貧困」の項 p.1835)を中心としたものではない。それは神、御子イエス、みことばを中心としたものである。ではこの希望にはどのようなものが含まれているのだろうか。

(1) 神の恵み(受けるにふさわしくない好意, あわれみ, 親切, 助け)と、現在の生活の中で受ける困難や苦しみを耐え抜くことができるように神が助けてくださるという事実(詩33:18-19, 42:1-5, 71:1-5, 13-14, エレ17:17-18)。神は時にはその状況から助け出してくださるけれども、時には力を与えて長く続く問題に耐えさせてくださる。

(2) 地上の苦しみは終るときが来るとい希望がある。罪が地上にもたらした問題と腐敗はそのときに終了し、肉体は復活して永遠に生きるようになる(ロマ8:18-25, ⇒詩16:9-10, Ⅱペテ3:12, →使24:15注, →「肉体の復活」の項 p.2151)。

(3) 霊的に成長させ、救いを完成してくださるとい希望がある。そのとき私たちはこの世界から抜け出して神との交わりを永遠に続けることができる(Ⅰテサ5:8, →「救いについての聖書用語」の項 p.2045)。

(4) 新しい天に永遠の家があるとい希望がある(Ⅱコリ5:1-5, Ⅱペテ3:13, →ヨハ14:2注)。「その都を設計し建設されたのは神です」(ヘブ11:10)。

(5) 聖書が「祝福された望み」と言っている希望(テト2:13)がある。それは主イエスが再び来られて忠実なキリスト者たちが地上から引上げられて空中で主に会う時である(Ⅰテサ4:13-18, →「携拳」の項 p.2278)。その時キリスト者は主をそのままの姿で見、主と同じ姿に変えられる(ピリ3:20-21, Ⅰヨハ3:2-3)。

(6) 地上で神に忠実に奉仕したことに対する報酬として義の冠(Ⅱテモ4:8)、栄光の冠(Ⅰペテ5:4)のいのちの冠(黙2:10)を受けるとい希望がある。

(7) 永遠のいのちの希望がある(テト1:2, 3:7)。これは主イエス・キリストに頼り従う人々全員に保証されている(ヨハ3:16, 36, 6:47, Ⅰヨハ5:11-13)。永遠のいのちの祝福は神と御子イエス・キリスト(ヨハ17:3)を知ることによって今からでも体験することができる。そしてその関係は地上の生活を終えてキリストと永遠に過すときまでいつまでも続くのである。神と御子イエス・キリストに対して希望を持っている人にはこのようにすばらしい約束が備えられているので、キリスト者はこの希望をほかの人々と分け合いたいという切なる願いを持つべきである。ペテロはキリスト者に「あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしないさい」(Ⅰペテ3:15)と勧めている。